

スウェーデンの要介護老人の処遇について

安田 陸男

(毎日新聞編集委員)

はじめに

一昨年秋スウェーデンに3週間滞在するチャンスに恵まれた。どう過ごすか、考えていた矢先、知人のスウェーデン人の奥さん(日本人)から言われた。「スウェーデンの福祉を知りたいなら、福祉だけを取り出さないで、生活の中で見ることね」。いわゆる「視察」は避けよう。短期間ながらも「生活」することに努めよう、と思った。

ストックホルムで20年間暮らしている日本人のお世話で部屋を借りることができた。トイレ、バスなし。フロは、地下鉄で“公衆サウナ”に通った。食事は自炊。毎日、近くのスーパーに通い、朝食はパンを焼き、野菜をかじる日が続いた。

スウェーデンのお年寄りの施設で、一日でも働くことはできないか。大使館に頼んでも「無理」といわれた。できれば、シモのお世話ぐらいさせてもらいたかった。日本の特別養護老人ホームでは、そこで働く人たちの、あらゆる職種について体験させていただいた。特殊浴(寝たきりの人の入浴介助)とおむつの取り替えが一番キツかった。

「生きるとは、ひとの悲しみを知ることだ」と言った人がある。「年をとるにつれて、大事なことは“3カク”だ」と言われたことがある。文章をカク、汗をカク、そして恥をカクことだという。汗をかいた人の言葉の重みは、汗をかいた経験のある者にしかわからない。スウェーデンでも汗をかきたかった。とにかくアグラをかきながら自分の価値感を、恥をかきながら改めたかった。

さいわい、ストックホルムの施設で汗をかく機会が与えられた。お年寄りとの触れ合いの中でいただいたすばらしいプレゼントは、いまも、思い出すと胸が熱くなる。お年寄りの悲しみを失くすために、私たちはどうすればいいのか。スウェーデンで学んだ一端をルポ形式でお伝えしたい。もちろん、恥をかきながら――。

1. ブラックベリー病院で

通算3日間通った。最初の2日間は、いわゆる視察、あとの1日は働かせてもらった。人権尊重の国だ。初日に院長に実習をお願いしたが「考えてみましょう」というだけでOKとはならなかった。視察の2日

間、機会あるごとに聞かれた。「なぜ働きたいのだ」と。「これまで2回ヨーロッパを訪ねました。責任者の話を聞いて、施設内を一巡しただけで終わりでした。それでも拝見しないよりはマシですが、お年寄りや働く人たちの気持ちがわかりません。記者の仕事として、従来はそれで通用してきました。しかし、年をとるにつれ、書くことがコワくなったのです。また、書かれる立場の人に対して、そんな取材では、失礼ではないか、と思うようになりました。いっしょに働き、いっしょに汗を流す中で、これまで見えなかったものが見えたという経験を日本でも味わいました」。

「どんな仕事をしたいのか」と聞かれ、「シモのお世話をしたい」と答えた。会ったばかりの外国人記者に、院内のお年寄りの世話など簡単にまかせられないのは当たり前だ。いま、振り返ってみると、恐らくテストされていたのかナという気がする。

2日目の視察の夕方だった。「許可します」と返事をもらった時は「やったあ」と思ったものだ。仕事がどんなにしんどいものか、その時は想像もできなかった。

約束の日の朝、決められた時刻に“通勤”した。視察の時は、通訳さんがいっしょだった。なにしろ、お年寄りは、スウェーデン語しか話せない。労働となると、通訳さんに付き添いを頼むわけにはいかない。若い職員たちの英語は、小学校時代から習っているだけに達者だ。スウェーデン語のお年寄りとは、乏しい英会話しかできない“実習生”とのコミュニケーションは、当然ながら“難航”をきわめた。

「私はロッタ。あなたをなんと呼んだらいいの?」。婦長に紹介されたブロンドの娘さんは21歳、准看護婦で、パートナーとしていっしょに仕事をしてくれる、という。白衣を着せられ、形だけは准看護夫になった。胸に大きな名札をつけなければならない。「ヤスと呼んでくれ」。レーガン大統領に答えた中曽根サンの言葉を思い出してニヤリとする思いだったが、名札に「YASU」と大きく書いた。

「Yasu, Follow me」。親父が小娘に引かれた格好だったに違いない。最初は70歳ぐらいの寝たきりのおじいさんのおむつの交換だ。86キロといった。お腹がブルンブルン揺れる。失礼な言い方だが、丸太をころがすようにして、まずロッタがおむつを外す。汚物をぬれた紙ナプキンでふきとったあと、私が乾いたナプキンでハダの水分を取った。

目が不自由だった。いつもとは違う慣れない手つきを感じたのだろう。「きよりは新人かい?」。恐らくスウェーデン語で聞いたに違いない。ロッタの答に「ヤーパン」（日本）と叫んでから「Thank you」と私の手をにぎってくれた。

「この人は96歳よ」と言われたおじいさんは、巨漢さんとは違って、枯れ木のようにやせ細って長身だった。着替えからはじまった。シャツとズボンにクツをはかせた。とても歩けるとは思えない。ロッタと両側から支えるようにして車いすに移ってもらいトイレへ直行だ。車いすに乗る人と押す人のスピード感覚が違うことを頭に入れないながら、ゆっくり押した。便器に座ってもらっ

てから席をはずした。

さあ、こんどは早足だ。おじいさんが用を足す間に、寝たきりのおばあさんの“始末”をしなければならない。九十歳ぐらい、パーキンソン病で筋肉が硬直していた。両足が聞かない。ロッタがはずしたおむつを、私が両足の間から引っ張るのだが、引こうとすると「痛いっ」（と私には聞こえた）。金切り声に、引く力がひるんでしまう。

「You must draw it」。こんどはロッタに叱られた。目をつぶる気持ちで「エイッ」。

苦い表情のおばあさんに、なんともやり切れない心地だった。新しいおむつに換えてから、ロッタがおばあさんの顔にホホをすり寄せ何やらささやいた。ニコッとしたおばあさん。「ロッタ、なかなかやるねえ」。お年寄りの機嫌を直してからベッドを離れるロッタの優しさに思わず胸が熱くなった。

朝9時から夕方4時半まで、トイレ専門介助員としての仕事は15人ぐらいだったろうか。重量級のお年寄りが多いのには参った。トイレ介助の合間には「Your job」と言われながらシーツ交換や枕カバーやタオルをたたむ仕事も待っていた。正直いって疲れた。言葉のカベと新人にとっての仕事の量と。午後2時ごろには座り込みたい気分が襲われた。「Are you tired?」。察しの早いロッタが尋ねた。参ってたまるか、と余裕のある振りをして答えたものだ。「A little」。

ブラックベリー病院は、ストックホルム中央駅から地下鉄とバスを乗り継いでも30分とかからない距離なのに、シラカバ林が点在し、病院の窓からは、絵ハガキに登場

する美しいメーラレン湖が広がる。ベッド数400、慢性疾患のお年寄りが多い長期療養病院だ。一病棟に25人ずつ、16病棟あるうち4病棟が「ぼけ」と呼ばれる人たちの専用病棟だった。通院しながらリハビリに励むお年寄りのためのデイ・ホスピタルもあった。

正面玄関を入ると、まず目に入るのが図書館だ。職員、患者共用で市立図書館の分館になっているという。日本でも共用の図書館がある京都南病院で拝見したことがあるが、広さがケタ違いだ。廊下の壁には、県が買いあげたという美術作品が展示されていた。「公共建造物の建築費の中に、美術作品の購入費が含まれています。だって、芸術品というのは、個人が楽しむものじゃなくて、みんなが楽しむものでしょ」と言われた時には「参ったなあ」という感じだった。

体育館さながらの機能回復訓練室、作業療法室には、伝統の織機が20台近く並んでいた。陶芸室、木工室、オーディオ機器を備えた談話室や温水プールもあった。入院患者だけではなく、デイ・ホスピタルのお年寄りも利用できる。救急病院とは違う。お年寄りの「生活」を考えた設備だった。

この病院で、スウェーデン滞在中の“最大のプレゼント”をいただいたことも触れておこう。シモのお世話をさせていただいたお年寄りたちは、いずれも当初は固い表情だった。が、半日経過したところでガラリ変わった。ロビーに集まったお年寄りたちが、機会あるごとに「ヤス」と呼んでくれた。ある時は「ヤス、ヤス」と大合唱さ

ながらに声をあげてくれた。かけ寄ると両手を広げて抱きかかえホホずりしてくれる車いすのおばあさんもいた。人間の尊厳にかかわる部分をお世話させてもらったことからくる気安さがあったのだろうか。ちょっとした「人気者」になったヤスは、言葉のカベを乗り越えたうれしさに、人知れず「ありがとう、ありがとう」と涙ぐんでいた。

2. 訪問看護に同行して

ストックホルムの中心部に近いマティウス地区。そこの地域医療センターに所属する准看護婦さんの訪問看護に同行した。

「さあ、出かけましょ」。センターを午前8時、ハタチを過ぎたばかりのサリーとクリスティーナがいっしょだ。二人ともアノラックにジーパンとズックスタイル、大きなショルダーバッグを肩にかけ、ハイキングにでも行くような格好だ。途中で二人は別れ、私はサリーに同行した。最初に訪ねた家は、古いアパートの2階に住むレンデルさん姉妹だった。姉が89歳、妹が87歳。ひとつの部屋の両端にベッドが並び、妹の方が寝ていた。そばに簡易便器があり、糖尿病という。

サリーが寝ている妹の腕にインシュリンの注射をした。姉の方は元気そうだ。「毎朝来てるの。お話をするのも大事な仕事でしょ。孤立してるんですもの、お年寄り。部屋の掃除は、ヘルパーさんが来てくれるわ」。採光がよくないのだろう。部屋の中は暗かった。「写真は？」と聞くと「待っ

て。いま髪をとかすから」。妹のおばあさんは手鏡で身づくろいをした。その気概がうれしかった。

「こんどの家は、住み込みのヘルパーさんがいるのよ。彼女もケアを受けなければならぬ年齢なの」。74歳のおじいさん宅もアパートの一室だった。なんと、さっき別れたばかりのクリスティーナも来ているではないか。「二人でやるのが認められてるの」という。ドアを開けた途端、し尿のにおいが鼻を突いた。「彼、やっちゃったらしいわ。こちらの部屋にいてね」。二人は、ビニール製のエプロンを素早くつけると、においのある部屋へ飛び込んでいった。

おじいさんは、パーキンソン病のうえ、知恵遅れが少しあるらしい。ほとんど全介助の生活だった。若いころは、かなりの家に住んでいたのだろう。そのころのお手伝いさんが、いま、ヘルパーとして認められて住み込んでいた。ルーツさんといい75歳だった。おじいさんの“専属ヘルパー”だった。ところが、最近、足をけがして動きがとれなくなった。ちょうど、ルーツさんの姉のアンネさん（78歳）が心配して、300キロ離れた町からかけつけてきた。「私も独り暮らし。あすは帰らなければ」と妹の足を気にしていた。

サリーが、おじいさんのシモの世話をしている間に、クリスティーナは、ベッドメイキングだ。ひと仕事終わると、こんどは、ヘルパーおばあさんの傷の手当てだ。サリーとクリスティーナがいっしょになってやっていた。不安そうに見守るアンネさん。

「買い物のヘルパーが週に一度来るのよ」とサリーが言った。なるほど、ヘルパーを“ヘルプするヘルパー”がいるのか。援助システムの奥行きを思い知らされた。

「あしたはシャワーよ」。サリーがおじいさんに言葉をかけると「やだよ」。ダダっ子のような返辞だった。孫のような娘とおじいさんの、息の合ったやりとりに、ぬくもりを感じたものだ。「じゃあ」。サリーとクリスティーナは、また別れた。

センターに勤務する内科医のハンスさんの話によると、訪問看護体制は、人口3,000人につき医師1人、看護婦と准看護婦各2人の計5人がチームを組むのだそうだ。准看さんは毎日訪問、看護婦（夫）さんは午前中はセンターに勤務して住民の健康相談に答え、訪問活動は午後だけ、医師は週に一度、受け持ちの患者を全員みることにしている、という。「私の仕事で、ヘルパーのようなことをする機会が多いんですよ。もっとヘルパーの数を増やしてくれれば、十分な仕事ができるんですが……」。スウェーデンなりに、医師の悩みはあるようだった。「ナイトパトロールは、はじめたばかりです。また、体操士（日本での理学療法士のことか？）や作業療法士も訪問看護をやりますよ」。定期的ではないようだったが、層の厚さを知らされた。

3. サバツベリー病院で

この病院の「75病棟」は、「ぼけ」と呼ばれるお年寄りたちのデイ・ホスピタルをやっていた。2日間通い、2日目は“一日

職員”として働かせていただいた。ぼけのお年寄りの通所施設としては、パイオニア的存在という。開設して6年、訪問当時でストックホルムに、この種の通所施設は5カ所、地方に10カ所できていた。

日本でも「ぼけ」（いやな言葉だが）と呼ばれる人たちの施設を、かなりお邪魔させてもらった。熊本の国立療養所菊池病院、四日市の第二小山田特別養護老人ホーム、豊橋の山本病院、東京の特養「山水園」など、それぞれが処遇のあり方を求めて模索している。とくに山水園では、近いこともあって、時には2日、時には一週間と、寮母さんといっしょになって働かせてもらった。時間をおいて訪ねると、顔なじみのお年寄りの顔が見えなくなっている。歯の抜けたように、ひとりひとりが他界していた。「生」と「死」の厳しさを訪問の都度、味わっていた。

サバツベリー病院では、職員のユニホームがなかった。「山水園方式だな」と思ったものだ。「生活の場に制服なんてありますか」と言った石井健太郎元園長の言葉を思い出していた。お世話するお年寄りは、一日25人。週2回の人であれば5回の人もいるという。職員は、インゲルさんという看護婦出身の施設長のほか内科医1人、准看護婦6人に作業療法士、事務員各1人、精神科医と体操士とソーシャルワーカーが非常勤で、実習中の学生が常時2、3人はいるようだ。

処遇プログラムは、まず朝食からはじまる。このあと小グループに分れて、新聞を使っての記憶回復訓練だ。「きょうは何月

何日か「お天気はどうか」などから、新聞の記事を職員が読みあげ「むかしはどうでしたか」と尋ねる。職員の話にいっさい関心を示さず、勝手なことをしているお年寄りがいるのは、日本でもおなじみだ。昼食前の一時間は、グループごとに買い物訓練のため外出したり、菓子づくりやゲームをする。昼食後は、休憩のあと、お年寄りのなじみの歌に合わせた体操で体をほぐし、またスライドを使ったり、絵合わせゲームなどを繰り返す。

一日職員として“通勤”した日は、朝からピアノを弾いているおばあさんがいた。自己流の旋律らしい。迎いのタクシーでお年寄りが続々集まっているところだった。「うるさいっ」とでも叫んだのだろうか。ソファにくつろいでいた別のおばあさんが、苦りきった表情で立ち上がり、ピアノおばあさんの腕をつかんで阻止行動に出た。職員が“仲介”に入ってその場は収まったが、5分もたたないうちに、ピアノおばあさんの演奏がはじまった。阻止したおばあさんの目が光った。立ち上がろうとした時、私はピアノおばあさんのそばにかけより、リズムに合わせて手拍子をとってみた。“阻止おばあさん”は動かなかった。それに比べ、ピアノおばあさんのうれしそうな表情といったらなかった。

朝食と昼食のテーブルの支度は、比較的軽症のお年寄りたちの仕事だ。重症の人には、マンツーマンで介助する。車いすで言語障害のあるおばあさんの食事介助をさせてもらった。主食のジャガイモに肉、ニンジンそれぞれが細かく刻まれている。いわ

ゆる「刻み食」だ。ホワイトソースで味つけてして、スプーンで口元へ運ぶのだが、なにしろ言葉が通じない。「さあ、おばあちゃん、こんどは肉だよ」「どうです、おいしいでしょう」と、“声がけ”をすべて日本語でやってしまった。無言で食事をしてもらうことの空しさより、話すことの大切さは、日本の施設での経験で身にしみていたから。デザートから最後のコーヒーまで全部平らげてくれた時には、ホっとした。

食事を終えて、ロビーへおばあさんに戻した時だ。おばあさんと握手して離れるつもりだった。それが、両手で握ってきて離さないばかりか、そのままコックリ気持ちよさそうに寝入ってしまった。約1時間、身動きできなかった。身体を見ず知らずの外国人に託して眠るお年寄りに、こちらの方から「おばあちゃん、ありがとう」と感謝したかった。

4. おわりに

3週間、ストックホルムから外へはほとんど出なかった。訪ねた場所は少なかったが、さまざまな体験をさせていただいた。サービスハウスでは、ヘルパーさんに同行してお年寄りの部屋を訪ねた。お年寄りの性格に合わせて仕事をするヘルパーさんのお手並みはさすがだった。また、ヘルパーを養成する高等学校を訪問した時だ。授業を中断して「日本人記者と話合しましょう」とイキなはからいを見せてくれた先生もいた。ハダの色がさまざまなハイティーンの生徒たちと、スウェーデン社会におけるへ

ルパーのタマゴとしての誇りや不満を聞いた。「日本で記事になったら送ってね」。別れぎわにかけ寄って来て恥ずかしそうに言った黒人生徒がいた。送られた新聞を見て、生徒たちは、あれからどんな話合いをしたのだろうか。

日本の厚生大臣に当たるステン・アンダーソンさん（現在外相）を訪ねたことも忘れられない。「日本の厚生大臣夫妻とお会いした時、私の妻も働いている、と言ったのですが、どうしても大臣にはわかってもらえなかった。党（社民党）の Secretary 時代には、私も半年間の育児休暇をとりまし

たよ。日本には“老いに備える”必要があるようですが、私の国にはありません。家計簿に貯蓄という項目がないのですから」。

A I D S（エイズ）ぼやりの昨今だが、Anything Imported Drastically Syndrome という“病気”もあるそうだ。「外国かぶれ」というのだろうか。そんな病気にかかりたくはないが、お年寄りをひとりの人間としてみる、社会を構成する人たちの中には「ぼけ」と呼ばれる人たちだっているんだ、という意識の強さを自然に持っている人たちが多くことに頭の下がる思いがしたものだ。